

卷頭言

特色ある一流の中規模学会を目指して

会長 馬場宣良



本会の上部団体である日本工学会に加入している学協会の数は平成5年3月現在で88団体あり、その中には正会員数4万名を越えるマンモス学会から600名程度のミニ学会まである。それぞれ同好の専門家が集って特定の分野で活動をしており、これらが日本の科学技術の基礎を支えているといえるだろう。これらの中で日本表面科学会は会員数約1,500名、学協会の中では中規模の学会に区分される。

中規模学会にはマンモス学会ではない特長がある。それは一言でいえば小回りがきくということであろう。最近のマンモス学会は巨大化し過ぎて動きがとれなくなってきたのが実情のようで、たとえばあるマンモス学会の年会は2,000件を越える講演発表があり、多数の講演会場、分科会会場に分れ、その一つ一つの会場をとってみれば時代のトピックスとなるような特別な講演テーマを除けば会場での聴講者の数はまばらであり、時には座長と関係者のみといった風景も見られるようである。それもそのはずで、これだけ多数の講演会場に分れていれば人気の少ない講演会場が現れても当然の成り行きかもしれない。結局は大学会といえども各セッションの専門分野ではごく限られた方々の会場となり、いつも顔を合せるメンバーであったりしている。そして講演時間が限られ、遅延が許されないということもあって質疑応答も十分にできず、総花的になりやすい。

それに比べると、本学会の講演大会はたかだか2会場であり、その分野に関心のある方々が集って非常に活発に討論を行っている。時には時間オーバーすることもしばしばである。このように本当に実のある討議が行われてこそ真の学問の進歩に寄与するといってよいだろう。

本会の特長はまだある。学術講演大会の参加費が講演要旨付きで平成5年度現在4,000円というのはまさに割安といえるだろう。それに比べると特に化学系のマンモス学会の参加費は非常に高く、講演要旨集を含めば1万円を超える。それもそのはずで多数の講演会場を抱えた学会であるから、参加者は自分の関心のある部門以外の大多数の会場の運営費と講演要旨集の印刷代をも負担しているわけである。

本学会は間もなく15周年を迎える。このときには表面科学国際シンポジウムが開催される予定となっており、世界の一流の表面科学の研究者、技術者が一堂に集ることになっている。これを機会に中規模学会の特長を十分に活用しながら会の経済的基盤を確立し、特色ある世界一流の学会に発展していくことを切に願ってやまない。

(東京都立大学 工学部)